六朝文人における虞韻唇音・云母字と魚韻の通押現象

三輪大樹

要旨　從陸機、陸雲兄弟所代表的西晉吳地文人的用韻中可以看出，魚韻和虞韻間有著明顯區別，但虞韻的唇音和云母字與魚韻字之間存在通用現象。這種通用現象在張融等吳人，彭城劉氏、謝超宗、謝朓、王儉、江淹、張纘、徐陵、庾信等南渡士人的後裔，以及牛弘等北朝人的用韻中也可以觀察到。從音位學的角度，可以考慮是唇音和云母所共有的特徵引起了魚韻/o/和虞韻/u/的元音的中和（neutralization）。基於以上觀察，本文對三國、西晉時期吳語的云母構擬了和唇音一樣具有強烈圓唇性的聲母 w。同時，提出了三國、西晉時期吳語的模韻元音也等於/o/和/u/的超音位（archiphoneme），其聲母也存在和圓唇性相似的有標特徵這一可能性。

キーワード　魚虞通押　中和　声母 w　呉方言

1. はじめに

魏晋南北朝において「南北」あるいは「士庶」の言語間に差異があったことは古来よく知られているが、その中でも魚・虞韻の区別は非常に重要な争点である。古くは『顔氏家訓』音辭篇に「北人以庶為戍，以如為儒（北方人は“庶魚去[1]”を“戍虞去”、“如魚平”を“儒虞平”とする）」（周祖謨 1943/1966: 413）、「北人之音多以舉莒為矩（北方人の音では多く“舉”“莒”を“矩”とする）」（同 423）と「北人」は魚・虞韻を区別しないことが記され、現代の羅常培（1931）や Ting（1975）による押韻資料の分析でも魚・虞韻の区別が魏晋南北朝の諸言語のうち、本来的には呉方言に由来する特徴であったことが明らかとなっている。

しかし、呉方言を母語としていた西晋の陸機・陸雲兄弟、あるいはその後の南朝文人の押韻において、大勢としては確かに魚・虞韻を区別しているものの、わずかに通押例が見られる。このような通押の発生条件について、先行研究では十分な検討が加えられていたとは言い難い。本稿では、そのような魚・虞通押の条件を明らかにし、その音声学・音韻論的原理を論じたい。

2. 先行研究とその問題

魏晋南北朝時代の魚・虞韻の分合について最初に整理を行ったのは羅常培（1931）である。彼は六朝の押韻資料全体に対して定量的な分析を行い、呉籍すなわち呉に本貫を有する文人が魚・虞韻を区別していることを論証した。しかし、その用例の数が膨大であったこともあり、問題点もいくつか存在する。以下で簡単に論じる。

2.1 文人の出身地認定の誤り

羅常培（1931/1963: 6-7）は魚・虞韻を区別しているのが江南の金陵を中心として、彭城を北限、余姚を南限とした円の中に収まるとする。その結論自体は誤りではない。し

[1] 字の右下に適宜『廣韻』の韻目（平声で代表させる）と声調を補う。以下同様。

かし、彼は各文人の出身地を**本貫**を基準に判定したため、文人の実際の出身地が反映されないという問題を生むこととなった[2]。ここでは従来あまり指摘されてこなかった問題点として、彭城劉氏の出身地について論ずる。

上述のように羅常培は彭城を魚・虞韻を区別する方言区に含めるが、これは専ら宋の皇族である彭城劉氏が魚・虞韻を区別していることを根拠とする。しかし、彼らは明らかに南渡士人である。『宋書』巻 1 武帝本紀（1）に「旭孫生混，始過江，居晉陵郡丹徒縣之京口里（劉旭孫は劉混を生んで、ようやく長江を渡り、晋陵郡丹徒県の京口里に居を構えた)」とあり、宋武帝劉裕の曽祖父である劉混の段階で既に江南に移っていたことが分かる。このため、彭城そのものを呉方言区と見ることはできないが、3.2.2 節で見るように彭城劉氏が呉方言の影響を受けていた可能性は非常に高い。

2.2 魚・虞韻通押条件の誤り

羅常培が論ずるように、確かに呉地の文人は魚・虞韻を区別する。しかし、そのような文人においても通押例がわずかながら存在する。羅常培（1931/1963: 7）は、そのような例において、魚韻と通押する虞韻字の声母はいずれも牙音、唇音、喉音喩母、来母字に限られるとする。しかし、3 節で詳しく論ずるように、陸機・陸雲兄弟、あるいは宋の彭城劉氏といった最も魚・虞韻を区別する文人においてごく少数に見られる通押例を精査すると、その全てが虞韻唇音・云母に偏るという明確な傾向を見せる。

また、仮に上記声母の全てが通押するとして、その音声原理に対する説明も不十分である。羅常培（1931/1963: 21）は声母の異化作用（dissimilation）を受けて虞韻字の主母音の音価が変わった可能性を想定するが、これらの声母がなぜ異化作用を発生させるのか不明確である。

2.3 韻字認定の誤り

そして、最大の問題は氏の韻字認定に誤りあるいは疑わしいものが非常に多いことである。以下は呉籍文人の作品中、氏が魚・虞通押例として挙げたものである[3]。

(1) 望九衢以遠肆，明皇極而永舒魚平。蔽陽光于湯谷，闇天文乎帝居魚平。齊濛荒于無極，等混昧于太初魚平。翼靈鳳于蒼梧模平。起滯龍于潢汙模平。（陸機，白雲賦，全晉文 96-1b）

「舒」「居」「初」は魚韻である。羅常培は「汙」を虞韻として魚・虞通押例と見なすが、「潢汙」は『左傳』隱公三年に由来し、『經典釋文』15-4a が「汙音烏」とするように模韻字である。模韻は一等韻であり、魏晋南北朝時代では一般に三等韻の魚・虞韻双方と通押する。なお、周祖謨（1996: 211）では模韻字「梧」も韻字に含める。ただし、ここでは模韻の 2 句は「龍」「鳳」という特別な動物について歌う待遇表現であり、そもそも換韻している可能性も併せて指摘しておく。いずれにせよ、魚・虞通押例ではない。

(2) 余本水鄉士，閉門江海**隅**虞平。時逢世道泰，蹇足步高**衢**虞平。名成宦雖立，效微功日疏魚平。入仕乘肥馬，出守擁高車魚平。關門遊昔吏，遷亭有故書魚平。江派資賢牧，宗英出建旗魚平。不勞王布鼓，無賴露田車魚平。弼政非責實，求名已課虛魚平。長卿病猶在，修齡疾未祛魚平。詎知亭長肉，寧掛府丞魚魚平。（陸倕，以詩代書別後寄贈詩、梁詩 13-1775）

[2] この点については潘悟雲（1983）が詳しい。
[3] 以下、本稿の例は全て『全上古三代秦漢三國六朝文』、『先秦漢魏晉南北朝詩』から採る。なお、羅常培は詩のみ『全漢三國晉南北朝詩』（丁福保編，1916）を用いている。

この例は、冒頭の「隅」「衢」のみが虞韻平声であり、残りは全て魚韻平声である。このような場合、通押にも換韻にも見える。まずこの続きを全文挙げる。

(3) 不能未能**止**，内訟慚諸**已**。僶俛從王事，纚舟出淮**泗**。（以上脂部）
朋故遠追尋，暝宿清江陰。明旦一分手，飜飛各異林。歸舟隨岸曲，猶聞歌棹音。行者日超遠，誰見別離心。夕次洌洲岸，明登慈姥岑。水流多迴復，余歸良未尋。（以上侵部）
江關寒事**早**，夜露傷秋**草**。心屬姑蘇臺，目送邯鄲**道**。（以上豪部）
葭葦日蒼蒼，親知慎早涼。劉兄消渴病，休攝戒無良。殷弟癲眩疾，行止避風霜。劉侯有餘冷，宜餌陟釐方。伏子多風咳，門冬幸易將。率更愛雅體，體弱思自強。吏曹勉玉潤，諷議勗金相。比部多暇日，奚用肆龍章。建德何為者，無墮無人鄉。記室朋從暇，露蝎附行商。議曹坐朝罷，尺板嗣徽芳。雙栖成獨宿，俱飛忽異翔。眷言思親友，沈思結中腸。（以上陽部）
追惟疇昔時，朝府多歡暇。薄暮塵埃靜，飛蓋遙相迓。李郭或同舟，潘夏時方駕。娛談終美景，敷文永清夜。促膝豈異人，戚戚皆朋婭。（以上麻部）
今者一乖離，濵然心事差。山川望猶近，便似隔天涯。玉躬子加護，昭質余未虧。八行思自勉，一札望來儀。（以上支部）

4 句のみで換韻する韻字を太字で示している。4 句で脂部「止」「已」「泗」が押韻した後、侵部「尋」「陰」「林」「音」「心」「岑」「尋」に換韻している。また、その後も 4 句で豪部「早」「草」「道」が押韻した後、陽部「蒼」「涼」「良」「霜」「方」「將」「強」「相」「章」「鄉」「商」「芳」「翔」「腸」に換韻している。この流れを踏まえると、虞韻が 4 句のみで押韻した後魚韻に換韻していると見なすことも可能であろう。周祖謨 (1996: 1110) でも「隅」「衢」を独立させており換韻と見なしている。筆者もこの説に従いたい。

(4) 桂舟既容與魚平，綠浦復回紆虞平。輕絲動弱芰，微楫起單鳧虞平。扣舷忘日暮，卒歲以為娛虞平。（沈約，釣竿，梁詩 6-1623）

「紆」「鳧」「娛」は虞韻平声である。羅常培は初句魚韻「與」も韻字と見なす。「容與」は沈約自身が「梁三朝雅樂歌六首」の「寅雅」（梁詩 30-2171）で「禮莫違，樂具舉。延藩辟，朝帝所。執桓蒲，列齊莒。垂衮毳，紛**容與**。升有儀，降有序。齊簪紱，忘笑語。始矜嚴，終酣醑。」と魚韻の上声字同士で押韻させている。また、魏晋南北朝時代の「容與」の「與」が韻字として用いられている詩の例には嵇康「四言贈兄秀才入軍詩」（魏詩 9-482)、阮籍「詠懷詩十三首」一（魏詩 10-493)、謝朓「江上曲」（齊詩 3-1417)、陶功曹「採菱曲」(齊詩 6-1476)、何遜「贈江長史別詩」(梁詩 8-1686)、「初發新林詩」(梁詩 8-1689)、徐勉「採菱曲」（梁詩 15-1811)、謝微「濟黃河應教詩」（梁詩 15-1820）があるが、全て上声字として用いられている。「容與」は双声の擬態語であることから、本来の上声で読まれていない可能性も完全には否定できないものの、以上のような例から(4)の「與」も上声である可能性が高く、韻字とは見なし難いように思われる。周祖謨（1996: 1109）も韻字と見なしていない。

(5) 輕生宅園籞魚上，復得棲嘉樹虞去。豈敢擅洪枝，輕條遭所遇虞去。葉密形易揚，風迴響難住虞去。（沈約，聽蟬鳴應詔詩，梁詩 7-1655）

「樹」「遇」「住」は虞韻去声である。羅常培は魚韻上声「籲」も韻字とするが、声調が異なる。周祖謨（1996: 1123）も韻字とするものの、四声説を唱えた沈約の作品であることを重視し[4]筆者は韻字と見なさない。

(6) 成閏暑與寒，春秋補小月。念子時無閒。折楊柳尤上，陰陽推我去魚去，那得有定主虞上。（西曲歌・月節折楊柳歌十三首・閏月歌，晉詩 19-1068）

羅常培はこれを誤って「吳聲歌曲」とするが、正しくは「西曲歌」である。また、「主」は虞韻上声である。「去」は魚韻であり、羅常培は上声と見なした上で通押と見なしているが、意味の上でも明らかに去声であり、声調が合わない。「折楊柳歌」の各首は(6)のように五言 3 句＋「折楊柳」3 字から成る句+五言 2 句の形式で構成されるが、13 首ある中の他首で最後の 2 句が押韻する例はない。これらの点から、これを魚・虞通押例とは見なせない。周祖謨（1996: 254）はむしろ尤韻字「柳」と「主」が韻字であるとしており、筆者もこれに従う。

また、北籍文人の押韻例についても検討の余地がある。本論と関わるもののみ挙げる。

(7) 白露掩江皐，青滿平地蕪虞平。長夜亦何際，銜思久踟躕虞平。企余重蘭貝，清才富金瑜虞平。獨豔始東山，擅麗終西都模平。雲精無永滯，水碧豈慙濡虞平。屬我茲景半，賞爾若光初魚平。折麻異離羣，紉蕙非索居魚平。頻贈既雅歌，還懷諒短書魚平。（江淹，郊外望秋答殷博士詩，梁詩 3-1565）

羅常培（1931/1963: 11）はこれを魚・虞通押例であるとしているが、潘悟雲（1983/2002: 42）は換韻と見なせるとする。江淹については 3.3.3 節で詳細に論ずるが、確かに換韻と見なせるように思われる。

(8) 開轅門於淮渚魚上，泛艎皇之容與魚上。吟紫騮之長歌，奏玄雲之疊鼓模上。開右座而納文，設左廣而投武虞上。既風起而雲飛，復摧班而拉虎模上。泛樓船而鬱紆虞平，憶霸楚之雄圖模平。悲騅馬之不逝，忘鹿逐之長驅虞平。豈烏江之天險，資赤帝之神符虞平。（元帝蕭繹，玄覽賦，全梁文 15-3b）

羅常培（1931/1963: 14）はこれら全てを韻字と見なす。しかし、「渚」「與」「鼓」「武」「虎」は上声、「紆」「圖」「驅」「符」は平声であり、少なくともこれらは換韻と見なさなければならない。なお、周祖謨（1996）は魚部上声字「渚與」（1103）、模部上声字「鼓」「武」「虎」（1113）、模部平声字「紆」「圖」「驅」「符」（1111）でそれぞれ換韻しているとする。

(9) 梅樹耿長虹，芳林散輕雨虞上。蜀郡隨仙去魚去，陽臺帶雲聚虞上。飄花更濯枝，潤石還侵柱虞上。詎得零陵燕，隨風時共舞虞上。（張正見，賦得梅林輕雨應教詩，陳詩 2-2496）

羅常培（1931/1963: 10）は「蜀郡隨仙去」の「去」を韻字に含めた上で魚・虞通押例と

[4] 沈約には上・去通押例が「正陽堂宴勞凱旋詩」（梁詩 6-1632）の「祜杜戶賈模上傅虞去」の 1 例あるものの、これは彼の 2 例しかない虞・模通押例の 1 つでもあり、極めて例外的なものであると思われる。なお、虞・模通押例のもう 1 例は「反舌賦」の「暮素模去樹虞去」（全梁文 25-8a）である。

するが、潘悟雲（1983/2002: 41）が指摘するようにこれは奇数句でありしかも声調が異なり、韻字とすべきではない。

以上、羅常培の韻字認定には少なからず問題があることが分かる。

3. 魚・虞通押例の検討

しかし、以上の例を除外したとしても魚・虞通押例が存在することは確かである。以下、時代を追って各文人の魚・虞韻の使用状況について考察する。

3.1 三国・西晋期の呉方言：陸機・陸雲兄弟

3.1.1 魚・虞通押例

まず、三国呉に生まれ、呉の滅亡後は西晋に仕えた陸機（261~303）・陸雲（262~303）の二陸兄弟の押韻資料を検討する。彼らは言語形成期を呉地で過ごしており、呉方言のサンプルとしては最適であると考えられる。

二陸の作品では、魚韻と虞韻はそれぞれ独用されて基本的に同用されない。木津（1996: 45）によれば、二陸以外にも夏靖をはじめとして多くの呉人が洛陽に移り住み、北方人優位の洛陽社会において「呉人集団」と呼ぶべき同郷集団を形成していた。彼らの作品でも魚・虞韻は同用されず[5]、呉人集団の言語の均質性の高さを物語る。しかし、二陸の作品の中で魚・虞通押例がわずかに見られる。

(10)昔予翼考，惟斯伊**撫**虞上。今予小子，繆尋末緒魚上。（陸機，與弟清河雲詩三，晉詩 5-675）
(11)指明星以脈路，景即陰而無旅魚上。隨長川以問津，響修聲而和予魚上。聽歸音以自聞，踐無迹以窮處魚上。雖遘愍之既多，亦顛沛其何侮虞上。仰眾芳之遺情，希絕風之延佇魚上。（陸雲，九愍・渉江，全晉文 101-1b）
(12)乾鑒南眷，誕降我祖模上。顯考尚書，納言帝**宇**虞上。正命惟允，銓衡攸序魚上。（陸雲，晉故散騎常侍陸府君誄，全晉文 104-7a）
(13)威靈既授，六軍有序魚上。乃誓我眾，乃整我旅魚上。神干山立，雄旗電舉魚上。懸旌汜陽，即戎江滸模上。我后日敬，上帝臨予魚上。靖端夙夜，匪寧匪處魚上。經始緜緜，滂沱惟海哈上。乃幹中軍，入作內**輔**虞上。公侯陟降，在帝左右尤上。關羽滔天，作雲西土模上。帝曰將軍，整爾熊虎模上。赫赫明明，皇輿出祖魚模上。龍舟照淵，旗旆映野魚上。鋪敦江濱，仍執醜虜模上。（陸雲，吳故丞相陸公誄，全晉文 104-5b）
(14)乾鑒南眷，誕降我祖模上。顯考尚書，納言帝**宇**虞上。正命惟允，銓衡攸序魚上。（陸雲，晉故散騎常侍陸府君誄，全晉文 104-7a）

太字が虞韻字である。「撫」「輔」「侮」は虞韻**唇音**、「宇」は虞韻**云母**であることが注目される。唇音と云母はどちらも『切韻』において**魚韻字があきまとなっている**。このことは偶然であるとは思われない。もちろん、虞韻唇音・云母字は他の虞韻字と問題なく押韻する。例えば、陸機「漢高祖功臣頌」（全晉文 98-6a）は「藪武宇主虞上」を韻字とする。この点から、唇音・云母字が「虞韻ではなく魚韻に属していた」と考えることはできない。

[5] 「呉人集団」の魚韻および虞韻の押韻例として、夏靖「答陸士衡詩」（晉詩 5-694）の「輿書舒魚平」、鄭豐「答陸士龍詩・鴛鴦」五（晉詩 6-720）の「遊流浮憂舟尤平躕虞平」、同「南山」二（晉詩 6-722）の「鱮處擧與序語魚上」、同「中陵」四（晉詩 6-723）の「周浮尤平渝殊踰躕虞平」、張翰「杖賦」（全晉文 107-11b）の「手久首尤上距魚上」がある。魚韻と尤韻、虞韻と尤韻の通押例は見られるものの、魚韻と虞韻が通押することはない。

3.1.2 模韻との関係

ここで、模韻との関係についても述べておく。用例(12)(13)(14)では魚・虞韻の他に一等模韻も通押している。周祖謨（1996）の韻部では魏晋宋は魚・虞・模韻を全て魚部に帰属させ（もちろん呉方言では魚韻と虞韻は区別される）、斉梁陳隋では魚韻のみを魚部、虞韻と模韻を模部に帰属させる。陸機・陸雲の同時代の北方文人は確かにこれらの韻を区別せずに通押させる。しかし、陸雲・陸機は、模韻は虞韻よりも魚韻と同用される傾向がある。魚・模通押例は以下の通りである。

(15)肇敏厥績，武功聿舉魚上。烟煴芳素，綢繆江**滸**模上。昊天不弔，胡寧棄予魚上。（陸機，與弟清河雲詩二，晉詩 5-675）
(16)厥鎮伊何，實幹心膂魚上。文教內輔，武功外禦魚上。淮方未靖，帝曰攸序魚上。公于出征，奄有南**浦**模上。（陸雲，征西大將軍京陵王公會射堂皇太子見命作此詩三，晉詩 5-698）
(17)亹亹嘉時，飄忽棄予魚上。 有瞻逝深，永歎潛**滸**模上。 登願扶桑，仰結飛晷脂上。 伊人匪存，遺芳孰與魚上。（陸雲，失題三，晉詩 6-715）
(18)嗟痛薄祜，並罹哀**苦**模上。堂構既崩，過庭莫**覩**模上。我悴西鄰，子沈東**土**模上。契闊艱辛，誰與晤語魚上。身滯情往，神遊影處魚上。發夢宵寐，以慰延佇魚上。（陸雲，失題，晉詩 6-716）

一方、虞・模通押例は上述(13)(14)のような魚韻とも押韻している例の他は、以下の 1 例にとどまる。

(19)悠悠縣象，昭回太**素**模去。清濁迭興，升降啓**度**模去。遺和既爽，季春告**暮**模去。朱明來思，青陽受煦虞去。（陸雲，失題一，晉詩 6-714）

この点から、陸機・陸雲の呉方言では、模韻は虞韻ではなく魚韻と近いことが分かる。

3.1.3 唇音・云母以外の通押例について

なお、魚・虞通押例として、他に以下の例がある。

(20)哀時命之險薄，懷斯類以結憂尤平。手拊膺而永歎，形顧景而長愁尤平。生遺年而有盡，居靜言其何**須**虞平。將輕舉以遠覽，眇天路而高遊尤平。結垂雲之翠虬，駕琬琰之玉輿魚平 。揮采旄以煙指，靡華旌而電舒魚平。命日月以清天，吾將遊乎九閡哈平？。（陸雲，九愍・□征[6]，全晉文 101-4b）

最後の「閡」は『廣韻』では哈韻去声である。しかし、「九閡」は『漢書』巻 22 禮樂志の「專精厲意逝九閡，紛云六幕浮大海」（1062）に由来し、顔師古は如淳注「閡亦陔也」を引く。「陔」であれば哈韻平声となり、声調が合う。

この例では虞韻歯音字「須」が魚韻「輿」「舒」と押韻しているように見える。ただし、前半の「憂」「愁」「遊」は尤韻字である。尤韻字は少なくとも陸機・陸雲の作品では例えば陸機「皇太子宴玄圃宣猷堂有令賦詩」（晉詩 5-671）の「秀尤去數裕虞去」ように虞韻とは通押するものの、上の用例(13)の「右」を除いて魚韻と通押する例はない。一方、「閡」

[6] □は闕字。

は咍韻字である。咍韻字は陸機・陸雲の作品では陸機「漢高祖功臣頌」（全晉文 98-5b）の「舉魚上海咍上旅與楚魚上」のように魚韻とは通押するものの、虞韻と通押する例はやはり上の用例(13)の「海」のみである。

つまり、陸機・陸雲の作品では、**尤韻は（他に虞韻が韻字にない状態で）魚韻のみと、咍韻は（他に魚韻が韻字にない状態で）虞韻のみと通押することはない**[7]。この点を踏まえると、「憂」「愁」「須」「遊」と「輿」「舒」「閡」で換韻していると見なせるかもしれない。その場合、「須」を魚・虞通押例から除外することができる。

いずれにせよ、陸機・陸雲の作品において魚韻と通押する虞韻字は概ね唇音・云母字に限られると見て良いだろう。以下、この唇音と云母に注目しながら、他の文人の通押例を検討する。

3.2 東晋～宋

3.2.1 魚・虞韻を区別しない呉籍文人

呉人集団も世代が進むにつれて首都である洛陽方言の影響を強く蒙るようになる。二陸ら以降の晋の押韻例において、呉籍・北籍を問わず、明確に魚・虞韻を区別していると断定できる文人を見つけ出すのは難しい。晋の南渡以降、首都が建康に移ってからも、その傾向はしばらく続く。例えば、以下は晋陵郡無錫の顧愷之（344~405、東晋）の作品であるが、明確に魚韻と虞韻が通押している。

(21)崩巒填壑，傾堆漸**隅**虞平。岑有積螺，嶺有懸魚魚平。（觀濤賦，全晉文 135-3a）
(22)爾乃連綿絡幕，乍結乍**無**虞平。翕然靈化，得漸已麁模平。緗白隨川，方圓隨渠魚平。義剛有折，照壺則虛魚平。託形超象，比朗玄**珠**虞平。（冰賦，全晉文 135-3a）
(23)與八風而降時**雨**虞上。音中鍾律，步則規**矩**虞上。朱冠赫以雙翹，靈質翩其高舉魚上。歷黃冠于招搖，陵帝居之懸圃模平。（鳳賦，全晉文 135-3b）

このように、晋においては、魚・虞韻を声母の条件無く自由に通押する北方方言の影響力が非常に強かったことが見てとれる。

3.2.2 魚・虞韻を区別する北籍文人

その一方で、宋以降の南渡士人の間で魚・虞韻を区別する呉方言特徴が見られる例が出現する。魚・虞韻の用例が多く残っている例として、宋の皇族の彭城劉氏である江夏王劉義恭（413~465）、宋孝武帝劉駿（430~464）、南平王劉鑠（431~453）、明帝劉彧（439~472）の作品を取り上げる。いずれも、明らかに魚・虞韻を区別している。

(24)江南遊湘妃，窈窕漢濱女魚上。淑問流古今，蘭音媚鄭楚魚上。瑤顏映長川，善服照通澨魚上。求思望襄瀆，歎息對衡渚魚上。中情未相感，搔首增企予魚上。悲鴻失良匹，俯仰戀儔侶魚上。徘徊忘寢食，羽翼不能舉魚上。傾首佇春鷰，為我津辭語魚上。（江夏王劉義恭，豔歌行，宋詩 6-1247）
(25)騁騖辭南京，弭節憩東楚魚上。懿蕃重遐望，興言集僚侶魚上。于役未云淹，時遷變溽暑魚上。眷戀江水流，迴首獨延佇魚上。（江夏王劉義恭，彭城戲馬臺集詩，宋詩 6-1248）
(26)二象攸分，三靈樂主虞上。齊應合從，在今猶古模上。天道誰親，唯仁斯輔虞上。皇功帝績，理冠區宇虞上。（江夏王劉義恭，嘉禾甘露頌，全宋文 12-4b）

[7] この傾向は呉方言を反映していると考えられる『真誥』でも同様である。詳しくは木津（1992: 491-493）を参照。

(27)督護北征去，相送落星墟魚平。帆檣如芒檉，督護今何渠魚平。（宋孝武帝劉駿，丁督護歌三，宋詩 5-1219）
(28)督護上征時，儂亦惡聞許魚平。願作石尤風，四面斷行旅魚平。（宋孝武帝劉駿，丁督護歌五，宋詩 5-1219）
(29)宵登毗陵路，旦過雲陽郛虞平。平湖曠津濟，菰渚迭明蕪虞平。和風翼歸采，夕氛晦山嵎虞平。驚瀾翻魚藻，頹霞照桑榆虞平。（宋孝武帝劉駿，濟曲阿後湖，宋詩 5-1220）
(30)思甲陵寢，歡結枌都模平。眇懷沛濟，勤念宛吾模平。納壽遺老，設飲先居魚平。堂序朝秀，充廷集閭模平。（宋孝武帝劉駿，巡幸舊宮頌，全宋文 6-10a）
(31)白露秋風始，秋風明月初魚平。明月照高樓，露露皎玄除魚平。迨及涼風起，行見寒林疏魚平。客從遠方至，贈我千里書魚平。先敍懷舊愛，末陳久離居魚平。一章意不盡，三復情有餘魚平。願遂平生志，無使甘言虛魚平。（南平王劉鑠，擬孟冬寒氣至，宋詩 5-1215）
(32)琴角揮韻白雲舒魚平，簫韶協音神鳳來咍平。拊擊和節詠在初魚平，章曲乍畢情有餘魚平。（明帝劉彧，白紵篇大雅，宋詩 12-1371）

しかし、羅常培（1931/1963: 7）も挙げるように、魚・虞通押例が 2 つある。

(33)於穆不已，顯允東儲魚平。生知夙叡，嶽茂淵虛魚平。因心則哲，令問弘**敷**虞平。繼徽下武，儷景辰居魚平。（江夏王劉義恭，嘉禾甘露頌，全宋文 12-4b）
(34)密盼林梁，側眺池籞魚上。起北阜而置懸河，沿西原而殿清暑魚上。編茅樹基，采椽成**宇**虞上。（宋孝武帝劉駿，華林清暑殿賦，全宋文 5-1a）

「敷」は唇音、「宇」は云母である。虞韻唇音・云母の魚韻との通押は、明らかに二陸と同じ現象である。また、(32)に見られる魚・咍通押も、二陸と共通である。宋に至って、呉方言の特徴が南渡士人である彭城劉氏の間でも見られるようになることが分かる。

3.3 斉・梁

呉籍文人による魚・虞韻の混同と北籍文人による区別という相反する傾向は斉・梁以降特に顕著に見えるようになる。周祖謨（1996: 738）が指摘するように、斉・梁期から地区（本貫）の違いによって魚・虞韻の分合状況が分かれるようなことはなくなる。周祖謨の斉梁陳隋韻部で魏晋宋韻部の魚部（魚・虞・模韻）が魚部（魚韻）と模部（虞・模韻）に分割されるのはこの点に基づいている。

3.3.1 魚・虞韻の区別が厳密である呉籍文人

まずは魚・虞韻の区別が厳密であると考えられる人々を見てみよう。

呉人の沈約（441~513、宋～梁、呉興武康）には魚・虞通押例が一つも存在しない。上述のように、羅常培が通押とみなした用例(4)(5)は、実際には魚・虞通押例ではない。さて、彼の撰になる『宋書』巻 81 顧琛伝（2078）に「先是，宋世江東貴達者，會稽孔季恭，季恭子靈符，吳興丘淵之及琛，吳音不變（これより前、宋代江東の高貴な者は会稽の孔季恭、季恭の子の靈符、呉興の丘淵之と顧琛が、呉音を変えなかった）」とある。このことは、陳寅恪（1936/1992: 299）が指摘する通り、大部分の呉人はすでに「呉音」を使っていなかったことを示唆する。当然沈約もそのはずであり、実際彼の押韻の枠組は同時代の韻部の枠組を逸脱するものではなく、前時代の陸機・陸雲らのような呉方言の特徴は見られない。彼の押韻が北方にルーツを持つ士族と同じであったことは魯國堯（2002-2003/2003: 158）も指摘する通りである。呉音を用いていなかった沈約であっても、

魚・虞韻の区別のみは受け継いでいたのである。

この点は、沈約よりも後の世代の呉人である陸倕（470~525、宋～梁、呉郡呉）、張率（475~527、宋～梁、呉郡呉）、虞羲（?~510?、斉～梁、会稽餘姚）についても言える。彼らも周祖謨（1996: 738）が指摘するように魚・虞韻を明確に区別していた。上述のように羅常培が通押と見なした陸倕の用例(2)は実際には魚・虞通押例でない可能性が高い。

それでは、虞韻唇音・云母と魚韻の通押についてはどうか。筆者はここで、沈約と同時代の呉人である張融（444~497、宋～斉、呉郡呉）の例を検討する。張融は、『南齊書』巻 41 張融伝（721）に「廣越嶂嶮，獠賊執融，將殺食之，融神色不動，方作洛生詠，賊異之而不害也。（越の山中、凶悪な異族が張融を捕え、殺して食べようとした。張融は顔色を変えず、「洛生詠」を歌ったところ、賊は立派な人物だと感心して危害を加えなかった）」と記載する。「洛生詠」とはすなわち「洛陽書生の詩詠」であり、陳寅恪（1936/1992: 299-301）も指摘するように、呉人である彼も洛陽の詩詠に親しんでいたことが分かる。

確かに張融の押韻も、沈約と同様に呉方言的特徴は見られない。しかし、上記エピソードの直後、交州へと向かう海上で詠まれた「海賦」には、魚韻の用例が 3 つ存在する。

(35)是其回堆曲浦模上，欹關弱渚魚上之形勢也。（海賦，全齊文 15-1b）
(36)爾其奇名出錄，詭物無書魚平。高岸乳鳥，橫門產魚魚平。（同 2a）
(37)陰鳥陽禽，春毛秋**羽**虞上。遠翅風遊，高翮雲舉魚上。（同 3a）

用例(36)は、明らかに魚韻が独用されている。また、用例(35)のような魚・模通押は陸機・陸雲らに見られた特徴であり、特に模韻字「浦」が用いられていることは陸雲の用例(16)を想起させる。そして、最も重要なのは(37)である。魚韻字「舉」と通押している虞韻字「羽」は云母字である。このような例は、「洛生詠」を見事に歌うことのできた張融であっても、魚・虞韻を区別し、虞韻云母（及び唇音）のみ魚韻と通押する二陸以来の呉方言本来の特徴を受け継いでいることを示しているだろう。

3.3.2 魚・虞韻の区別が厳密である北籍文人

宋で魚・虞韻を区別していた彭城劉氏一族である劉孝綽（481~539、斉～梁）、劉孝威（496~549、斉～梁）らは、周祖謨が指摘するように魚・虞韻を区別している。また、王僧孺（465~522、宋～梁、東海郯）、何遜（468~518、宋～梁、東海郯）らも魚・虞韻を完全に区別している。

このような文人には魚・虞通押例が皆無である。筆者がここで注目したいのは、**魚・虞韻を区別していると考えられるにも関わらず、通押例もわずかに見られる**文人の例である。例えば、謝超宗（430?~ 483、宋～斉、陳陽夏）は「齊南郊樂章・登歌」の「序舉魚上」（齊詩 7-1490）、「齊明堂樂歌・肅咸樂」の「序俎魚上」（齊詩 7-1494）、「齊明堂樂歌・嘉薦樂」一の「舉序魚上」（齊詩 7-1495）では魚韻を独用しているが、魚・虞通押例が 2 つある。

(38)夤承寶命，嚴恭帝緒魚上。奄受敷錫，升中拓**宇**虞上。亘地稱皇，磐天作**主**虞上。月域來賓，日際奉土模上。開元首正，禮交樂舉魚上。六典聯事，九官列序魚上。（齊南郊樂章・肅咸樂，齊詩 7-1489）
(39)戲繇惟則，姬經式序魚上。九司聯事，八方承**宇**虞上。鑾迥靜陳，縵樂具舉魚上。凝旒若慕，傾璜載竚魚上。（齊太廟樂歌・永至樂，齊詩 7-1504）

歯音字「主」も用いられているものの、云母字「宇」が 2 例ともに用いられることはやはり注目に値する。なお、謝超宗の虞・模通押例は用例(38)のみであるが、魚・模通押例は用例(38)の他に「齊明堂樂歌・昭夏樂」の「車魚平都模平虛魚平」（齊詩 7-1498）、「齊南郊樂章・引牲樂」の「俎魚上祜模上」（齊詩 7-1489）がある。

同じく謝氏の謝朓（464~499、宋～斉、陳陽夏）は、周祖謨（1963/1966: 465-466）が指摘するように同時代の文人の中では沈約と並んで最も用韻が厳密であるが、魚・虞通押例が 2 例のみ存在する。うち 1 例で用いられている虞韻字は唇音「武」、云母「宇」のみである。

(40)濬哲維祖模上，長發其**武**虞上。帝出自震，重光御**宇**虞上。七德攸宣，九疇咸敘魚上。靜難荊衡，凝威蠡浦模上。（齊雩祭歌・世祖武皇帝，齊詩 7-1499）

魚・虞通押のもう 1 例は「奉和隨王殿下詩」八（齊詩 4-1446）の「布模去**樹**虞去豫魚去**賦**虞去」であり虞韻歯音字「樹」が魚韻字「豫」とともに韻字に用いられているが、これは隨郡王蕭子隆（散佚）に唱和したものであるため彼固有の押韻例からは除外すべきである。

なお、模韻については「詠蒲詩」の「蒲模平珠雛虞平塗模平軀虞平」（齊詩 4-1451）、「齊雩祭歌・迎神」四の「儛虞上祖模上」（齊詩 7-1498）、「三日侍華光殿曲水宴代人應詔詩」九の「舞柱武虞上祜模上」（齊詩 3-1423）のように虞・模通押例はあるものの、魚・模通押例は用例(40)以外に見られないように、魚韻よりも虞韻に近くなっているという変化がある。

いずれにせよ、謝超宗・謝朓のこのような魚韻と通押する虞韻字の声母の偏りは、同じ謝氏でも彼らより前の謝霊運らには見られない傾向であり、彼らが時代を経ても二陸が見せた呉方言的特徴を有していることに注意したい。

また、やはり同世代の王倹（452~489、宋～斉、琅琊臨沂）も、魚・虞通押例が 2 例のみあるが、いずれも唇音字「武」、云母字「雨」である。

(41)康世以德，撥亂資**武**虞上。威以雷霆，潤以風**雨**虞上。六術允昭，四義克舉魚上。自東徂北，遐方即敘魚上。（高帝哀策文，全齊文 11-5b）
(42)伊宋之季，天衢荐阻魚上。咨我儲貳，締縚江滸模上。衛女事齊，樊姬贊楚魚上。美著嬪嗣，徽音踵**武**虞上。（皇太子妃哀策文，全齊文 11-6a）

以上のように、斉代には謝超宗、謝朓、王倹のような呉人以外の南朝文人においても、魚・虞韻を区別し、通押する場合にも虞韻唇音・云母字に偏るという傾向が見て取れる。

3.3.3 魚・虞韻の区別が厳密ではないものの通押に声母条件が見られる北籍文人

一方で、魚・虞韻を概ね区別する傾向にはあるものの通押例もかなり見られる文人も存在する。特に興味深いのは、江淹（444~505、宋～梁、済陽考城）である。羅常培（1931/1963: 11）は江淹を魚・虞韻を区別していない文人の例に挙げる。しかし、潘悟雲（1983/2002: 42）も指摘するように明らかに魚・虞韻を区別している。

潘悟雲は詩の用例のみを挙げているが、文を含めた全ての魚韻独用例を挙げると「去故鄉賦」の「墟疏居魚平」（全梁文 33-7a）、「丹砂可學賦」の「居虛餘魚平」（全梁文 34-1b）、「麗色賦」の「女渚佇侶魚上」（全梁文 33-3b）、「横吹賦」の「序呂魚上」（全梁文 33-12b）、「蓮華賦」の「女與渚楚佇魚上」（全梁文 34-5a）、「齊太祖高皇帝誄」の「楚舉序渚魚上」（全梁文 39-6b）、「雜體詩・張黃門協苦雨」の「渚礎序舉侶楚佇魚上」（梁詩 4-1574）となる。これらに加え、羅常培が通押と見なした用例(7)も魚韻独用例に含められるだろう。

このように、江淹は魚・虞韻を区別していると考えられるが、魚・虞通押例も非常に多い。ただ、管見によれば、通押例において用いられている魚韻字・虞韻字の割合に応じて、その用字傾向に差が出るように思われる。

まずは、虞韻の押韻に魚韻字が例外的に同用される例を挙げる。

(43)皇晉遘陽九，天下横氛**霧**虞去。秦趙值薄蝕，幽并逢虎據魚去。伊余荷寵靈，感激狗馳**驁**虞去。雖無六奇術，冀與張韓**遇**虞去。甯戚扣角歌，桓公遭乃舉魚上。荀息冒險難，實以忠貞故模去。空令日月逝，愧無古人度模去。飲馬出城濠，北望沙漠路模去。千里何蕭條，白日隱寒**樹**虞去。投袂既憤懣，撫枕懷百慮魚去。功名惜未立，玄髮已改素模去。時哉苟有會，治亂惟冥數虞去。（雜體詩・劉太尉琨傷亂，梁詩 4-1575）

(44)晨遊任所萃，悠悠蘊真**趣**虞去。雲天亦遼亮，時與賞心**遇**虞去。青松挺秀萼，惠色出喬**樹**虞去。極眺清波深，緬映石壁素模去。塋情無餘滓，拂衣釋塵**務**虞去。求仁既自我，玄風豈外慕模去。直置忘所宰，蕭散得遺慮魚去。（雜體詩・殷東陽仲文興矚，梁詩 4-1576）

このような例において、虞韻用字の声母条件を見つけ出すことは困難である。ただし、潘悟雲も指摘するように用例(44)の魚韻字は末句の「慮」のみである。潘悟雲はこの例を以て江淹が魚・虞韻を分けていなかったとするには根拠不十分であるとする。また、用例(43)の魚韻字の1つ「舉」が上声字である点にも留意しなければならないかもしれない。

一方、虞韻字の数が魚韻字の数と等しい、あるいは魚韻の押韻に虞韻字が同用される例になると、その用字に偏りが見られるようになる。

(45)餘形可擧，殘色未去魚去，曜葳蕤而在草，映青蔥而結**樹**虞去，昏青苔於丹渚，曖朱草於石路模去，霞晃朗而下飛，日通籠而上度模去，俯形命之窘局，哀時俗之不固模去，定赤烏之易遺，乃鼎湖之可慕模去。（赤虹賦，全梁文 33-2a）

(46)於是臨虹蜺以築室，鑿山楹以為**柱**虞上。上曇曇以臨月，下淫淫而愁**雨**虞上。奔水潦於遠谷，汨木石於深嶼魚上。鷹隼戰而櫓巢，黿鼉怖而穴處魚上。（待罪江南思北歸賦，全梁文 33-4b）

(47)九重已閉，高門自**蕪**虞平。青苔積兮銀閣澀，網羅生兮玉梯虛魚平。度九冬而廓處，經十秋以分居魚平。傷營魂之已盡，畏松柏之無餘魚平。（倡婦自悲賦，全梁文 33-8b）

(48)所以樂精玄於太一，妙宮徵於清都模平。簫含聲而遠近，琴吐音而有**無**虞平。奏神鼓於玉袂，舞靈衣於金裾魚平。韻躑躅而易變，律參差而難圖模平。非南風之能擬，詎濮水之敢模模平。（丹砂可學賦，全梁文 34-2a）

(49)霞輕重而成采，煙尺寸而作緒魚上。熱風翕而起濤，丹氣赫而為暑魚上。對滲流之蛟龍，衝汶潨之霧**雨**虞上。耀綠葉於冬岫，鏡朱華於寒渚魚上。斂慧性及馴心，騫赬翼與青**羽**虞上。終絕命於虞人，充南琛於祕**府**虞上。（翡翠賦，全梁文 34-6b）

(50)高秩方臻，元禮有序魚上。王曰念哉，煇寵是與魚上。職褒宮閣，任卷文**武**虞上。飾華麗貂，榮金疊組模上。宏猷溢俗，曾芬冠古模上。（齊太祖高皇帝誄，全梁文 39-6a）

(51)雁縣告靜，象郡無**虞**虞平。杳鬱遠域，清麗瓊都模平。國填氓負，朝委事虛魚平。實翳哲相，嶽曜神居魚平。（齊太祖高皇帝誄，全梁文 39-6a）

(52)二妃麗瀟湘，一有乍一**無**虞平。佳人承雲氣，無下此幽都模平。當追帝女迹，出入泛靈輿魚平。掩映金淵側，遊豫碧山**隅**虞平。曖然時將罷，臨風返故居魚平。（悼室人詩，梁詩 4-1585）

(45)の「樹」、(46)の「柱」、(51)の「虞」、(52)の「隅」を除き、(46)(49)の「雨」、(47)の「蕪」、(48)(52)の「無」、(49)の「羽」、(49)の「府」、(50)の「武」のように魚韻と押韻

する虞韻字は全て唇音・云母字である。

興味深いのは張纘（499~549、斉～梁、范陽方城）である。周祖謨（1982/1996: 720）が指摘するように、確かに彼は魚・虞韻の区別をしていない。しかし、通押例には分布の偏りが見られるように思われる。以下、彼の通押例を全て書き出す。

(53)我皇帝膺籙受圖，聰明神**武**虞上。乘曇而運，席卷三楚魚上。師克在和，仁義必**取**虞上。形猶積決，應若飆舉魚上。（南征賦，全梁文 64-2b）

(54)曬姑熟之舊朔，訪遺迹兮宣**武**虞上。挾仲謀之雄氣，朝委裘而作**輔**虞上。歷祖宗之明君，猶負芒于盛**主**虞上。勢傾河以覆岱，威回天而震**宇**虞上。雖明允之篤誠，在伊稷而未舉魚上。矧有功而無志，豈季葉其能處魚上。（同 3a）

(55)息銅山而繫纜，訪叔文之靈**宇**虞上。得舊名而猶存，皆攢蕪而積楚魚上。想夫君之令問，實有聲于前古模上。拯巴漢之廢業，爰配名于鄒魯模上。辨山精以息訟，對祠星而寤**主**虞上。每撫事以懷人，非末學其能覩模上。（同 3b）

(56)若夫灌莽川涯，層潭水**府**虞上。游泳之所往還，喧鳴之所攢**聚**虞上。羣飛沙漲，掩薄草渚魚上。奇甲異鱗，雕文綷**羽**虞上。聽寡鶴之偏鳴，聞孤鴻之慕侶魚上。在客行而多思，獨傷魂而悽楚魚上。美中流之衝要，因習坎以守固模去。（同 4a）

(57)臨赤崖而慷慨，搉雄圖於魏**武**虞上。乘戰勝以長驅，志吞吳而幷楚魚上。總八州之毅卒，期姑蘇而振旅魚上。時有便乎建瓴，事無留于蕭斧虞上。霸孫赫其霆奮，杖邁俗之英**輔**虞上。裂宇宙而三分，誠決機乎一舉魚上。（同 5a）

(58)于是下車入部，班條理**務**虞去，砥課庸薄，夕惕兢**懼**虞去。存問長老，隱恤氓庶魚去。奉宣皇恩，寬徭省**賦**虞去。遠哉盛乎，斯邦之舊尤去也。（同 5b）

(59)令龜兆良，葆引遷祖模上。具僚次列，承華接**武**虞上。日杳杳以霾春，風淒淒而結緒魚上。去曾掖以依遲，飾新宮而延佇魚上。（丁貴嬪哀策文，全梁文 64-11a）

(60)仲月發初陽，輕寒帶春序魚上。淥池解餘凍，丹霞霽新**雨**虞上。良守謁承明，徂舟戒蘭渚魚上。皇儲惜將邁，金樽留宴醑魚上。（侍宴餞東陽太守蕭子雲應令詩，梁詩 17-1861）

(53)の「取」、(54)(55)の「主」、(56)の「聚」、(58)の「懼」を除き、(53)(54)(57)(59)の「武」、(54)(57)の「輔」、(54)(55)の「宇」、(56)の「府」、(56)の「羽」、(57)の「斧」、(58)の「務」、(58)の「賦」、(60)の「雨」は全て唇音・云母字である。

3.3.4 魚・虞韻の通押に声母条件が見られない文人

一方で、斉・梁期には魚・虞通押例が非常に多い文人も存在する。その典型は、大量の用例が残る梁の皇族である昭明太子蕭統（501~531、南蘭陵）、簡文帝蕭綱（503~551、南蘭陵）、元帝蕭繹（508~555、南蘭陵）らであろう。

用例が膨大になるため韻字のみを挙げると、蕭統は「殿賦」「**隅廡**虞平書魚平」（全梁文 19-1b）、「七契」の「裾魚平**軀**虞平」（全梁文 20-5a）、「**隅軀**虞平慮魚平」（同 6b）、「示徐州弟」の「**軀襦俱**虞平廬魚平」（梁詩 14-1793）、「示雲麾弟」の「阻舉渚魚上**雨**虞平所予佇魚上」（梁詩 14-1801）、蕭綱は「七勵」の「疏魚平**衢珠**虞平居魚平」（全梁文 11-9b）、「怨歌行」の「餘初虛魚平**軀**虞平除舒魚踈祛輿魚平」（梁詩 20-1907）、「有所思」の「輿疏虛魚平**蕪**虞平」（梁詩 20-1910）、「舞賦」の「侶魚上**拊赴**虞上」（全梁文 8-5b）、「三日侍皇太子曲水宴詩」の「**裕樹賦**虞去馭魚去」（梁詩 21-1929）、「丞相長沙宣武王碑」の「**符**虞平圖模平**虞**虞平初魚平徒模平」（全梁文 14-2a）、「吳郡石像碑」の「書魚平**銖驅軀劬**虞平祛魚平吳模平」（全梁文 14-6b）、「望同泰寺浮圖詩」の「圖模平**珠**虞平吾模平**殊雛鳧趨銖軀踰**虞平居魚平」（梁詩 21-1935）、蕭繹は「玄覽賦」の「**愚衢**虞平墟書魚平」（全梁文 15-1b）、「魚魚平**鬚軀珠**虞平書魚平」（同 6b）、「**娛渝**虞平書魚平**珠**虞平」（同

7a)、「戲作豔詩」の「**夫蹔珠**虞平餘魚平」（梁詩 25-2051)、「庾先生承先墓誌」の「**府**虞平舉魚平」（全梁文 18-2b）である。

他に、呉人である呉均（469~520、宋～梁、呉興故鄣）の「碎珠賦」の「**濡**虞平舒魚平**珠**虞平」（全梁文 60-2a）と「食移」の「阻佇魚上**縷**虞上」（全梁文 60-3b)、王倹よりも一世代後の文人である王融（467~493、宋～斉、琅邪臨沂）の「法樂辭」六の「**樹**虞去慕路模去去魚去」（齊詩 2-1390）と「贈族叔衛軍儉詩」七の「**務**虞去譽魚去素模去**樹**虞去」（齊詩 2-1394）のような魚・虞通押例がある。「贈族叔衛軍儉詩」には唇音字「務」が用いられているとはいえ、やはりこれらの文人には魚・虞通押の声母条件が見られない。

以上のような文人は、魚・虞韻区別の押韻習慣が部分的には見られるものの、大勢としてはこれらを区別しない前時代の北方文人の用韻を想起させる。

3.4 六朝末

六朝末の詩人において、魚・虞の区別は非常に厳密なものとなる。例えば張正見（523?~576?、梁～陳、清河東武)、あるいは呉籍の後主陳叔宝（553~604、呉興）には魚・虞通押例が一つも存在しない。2.3 節で述べたように羅常培が通押と見なした用例(9)は実際には魚・虞通押例ではない。

この時期の最も重要な文人は徐陵（507~583、梁～陳、東海郯）と庾信（513~581、梁～北周、南陽新野）であろう。潘悟雲（1983/2002: 40-41）でも論証しているように、この両者は明らかに魚・虞韻を区別している。しかし、通押例がわずかに見られる。まずは徐陵の例を挙げる。

(61)白馬號龍**駒**虞平，雕鞍名鏤渠魚平。諸兄二千石，小婦字羅**敷**虞平。倚端輕掃史，召募擊休屠模平。塞外多風雪，城中絕詔書魚平。空憶長楸下，連蹀覆連踕模平。（驄馬驅，陳詩 5-2523）

(62)我皇纂**武**虞上，攀號東序魚上。謁渭同周，迎門惟呂魚上。流矢為暴，攙搶斯舉魚上。惵惵蒼黎，危危刀俎魚上。（司空徐州刺史侯安都德政碑，全陳文 11-5a）

逯欽立は、(61)の「渠」は本集では虞韻字「衢」に作ると注する。いずれにせよ、虞韻唇音「敷」が韻字に用いられている。(62)は周祖謨（1996: 1104）は「武」を韻字に含めず魚韻独用とするが、仮に韻字に含められるのならばやはり「武」が唇音であることが注目される。

次に、庾信の例を挙げる。

(63)坤以為輿魚平，剛柔卷舒魚平。若方鏡而無影，似空城而未居魚平，促成文之畫，亡靈龜之圖模平。馬麗千金之馬，符明六甲之**符**虞平。（象戲賦，全後周文 9-3a）

(64)爾其摘芳林沼，行樂軒除魚平。閒尊卑之垂悅，隨上下之游**紆**虞平。（邛竹杖賦，全後周文 9-4b）

(65)乃數軍實，乃握兵**符**虞平。澆沙成壘，聚石成圖模平。風雲順逆，營陣孤虛魚平。靈雨鉦鳴，爟火飛孤模平。（周柱國大將軍紇干弘神道碑，全後周文 14-3a）

(66)止戈興禮樂，修文盛典謨模平。壁開金石篆，河浮雲霧圖模平。芸香上延閣，碑石向鴻都模平。誦書徵博士，明經拜大**夫**虞平。璧池寒水落，學市舊槐疎魚平。高譚變白馬，雄辯塞飛狐模平。月落將軍樹，風驚御史烏模平。子雲猶汗簡，溫舒正削蒲模平。連雲雖有閣，終欲想江湖模平。（預麟趾殿校書和劉儀同詩，北周詩 3-2373）

(67)昔我文祖，執心且危慮魚去。驅剪豺狼，經營此天步模去。今我受命，又無敢逸豫魚去。惟爾弼諧，各可知兢**懼**虞去。（周五聲調曲・商調曲二，北周詩 5-2428）

(64)の「紆」、(67)の「懼」を除き、いずれも虞韻唇音字「符」「夫」が用いられている。なお、周祖謨（1996: 1123）は他に「鏡賦」（全後周文 9-5b）の「取」を韻字と見なし魚・虞通押例とするが、これは「還從粧處**取**將歸」という句の一部であり明らかに韻字ではない。

この他、北朝出身者ではあるが牛弘（545~610、北周～隋、安定鶉觚）の押韻例も参考になる。彼は魚・虞韻はもちろん、周祖謨（1982/1996: 720）が指摘するように虞・模韻の区別も行っていた。唯一以下のような魚・虞通押例があるが、やはり「雨」は虞韻字である。

(68)天地之經，和樂具舉魚上。休徵咸萃，要荒式序魚上。正位履端，秋霜春**雨**虞上。（圜丘歌・文舞，隋詩 9-2756）

ただし六朝末でも沈炯（502~560、梁～陳、呉興武康）のように魚・虞韻がほとんど区別されない文人も存在する。王力（1936/1991: 18）では沈約や何遜らと比べて審音の度合が低かった可能性を指摘するが、正確な原因は不明である。

3.5 考察

以上のような斉以降の文人の魚・虞通押状況、通押例に用いられる唇音・云母字の状況をまとめたのが表 1 である。用例は上で特に論じたもの以外は全て周祖謨（1996）より採取し計上している。第 1 列は文人名、第 2 列はその生年[8]、第 3 列は呉籍であるか否か、第 4 列は北朝での滞在の有無を記している。斉以降、呉籍であるか否かが魚・虞韻の区別に影響しないことは、この表からも裏付けられるだろう。沈炯が魚・虞韻をほとんど区別せず、また庾信に魚・虞通押例が一定数見られるのは、北朝での滞在経験が影響している可能性がある。

第 5 列は魚・虞通押例の絶対数を示し、5 例以上の場合網掛けを施している。第 6 列は魚・虞通押例が魚・虞韻の用例全体の中で占める割合を分数と百分率により示し、半数以上の場合網掛けを施している。いずれの文人もそもそも用例が少ないため、用例の絶対数と割合の 2 つの基準を設ける必要があると考えたためである。

第 7 列は魚・虞通押例の虞韻字のうち唇音・云母字が占める割合を分数と百分率で示し、半数以下の場合網掛けを施している。なお、江淹のみ、左側には全ての例、右側には韻字の中で虞韻字が魚韻字よりも多い例を省いたものを示している。

表 1 から、魚・虞韻の区別自体は斉以降のほとんどの文人が行っていることが読み取れる。蕭統・沈炯といった少数の文人を除き、魚・虞韻の全押韻例の中で魚・虞通押例が過半数を占めることはない。このことから、斉以降の韻部において魚部（魚韻）と模部（虞韻）を分ける周祖謨の説は妥当であることが確かめられる。そして、通押例の多寡を問わず、ほとんどの文人において魚・虞通押例の虞韻字において唇音・云母字が占める割合は過半数を占める。南朝全体の字音変化（あるいは字音の規範意識の変化）の中で、魚・虞韻の区別及び虞韻唇音・云母の魚韻との通押という本来二陸ら三国呉～西晋の六朝初期の呉方言にしか見られなかった特徴が、文人の中で広く共有されるようになることが分かるだろう。

一方で、王融、呉均、蕭統、沈炯、蕭綱、蕭繹といった、明らかに唇音・云母字の割

[8] ここでは年代ごとの言語の変遷を可視化するため、生年順に並べている。なお、虞羲は生年不詳であるが、510 年頃卒であるためここでは 519 年卒の何遜の前に配している。

合が低い文人も存在する。このうち、王融と呉均を除いた四人は、魚・虞通押例の絶対数（第 4 列）あるいは割合（第 5 列）が多いという相関関係を見せる。このような文人においては、魚・虞韻を区別しない前時代の北人の押韻習慣を色濃く受け継いでいると考えられるだろう。

表 1 斉以降の文人の魚・虞韻通押状況と通押例における唇音・云母字の割合

文人	生年	呉籍	北朝滞在	魚虞通押例	通押例/総数(%)	唇音・云母/虞韻字(%)
謝超宗	430?	×	×	2	2/7(29)	2/3(67)
沈約	441	○	×	0	0/35(0)	—
張融	444	○	×	1	1/3(33)	1/1(100)
江淹	444	×	×	11	11/29(38)	11/20(55), 8/12(67)
王倹	452	×	×	2	2/5(40)	3/3(100)
謝朓	464	×	×	2	2/17(12)	2/2(100)
王僧孺	465	×	×	0	0/7(0)	—
王融	467	×	×	2	2/13(15)	1/3(33)
虞羲	?	○	×	0	0/4(0)	—
何遜	468	×	×	0	0/9(0)	—
呉均	469	○	×	2	2/11(18)	0/3(0)
陸倕	470	○	×	0	0/4(0)	—
張率	475	○	×	0	0/3(0)	—
劉孝綽	481	×	×	0	0/4(0)	—
劉孝威	496	×	×	0	0/9(0)	—
張纘	499	×	×	8	8/10(80)	14/19(74)
蕭統	501	×	×	5	5/9(56)	2/9(22)
沈炯	502	○	○	4	4/6(67)	2/9(22)
蕭綱	503	×	×	8	8/52(15)	6/23(26)
徐陵	507	×	○	2	2/8(25)	2/3(67)
蕭繹	508	×	×	5	5/23(22)	2/12(17)
庾信	513	×	○	5	5/69(7)	3/5(60)
張正見	523?	×	×	0	0/6(0)	—
牛弘	545	×	○	1	1/6(17)	1/1(100)
陳叔宝	553	○	○	0	0/6(0)	—

4. 魚・虞韻通押の音声学・音韻論的説明

それでは、本来二陸ら六朝初期の呉方言において固有であり、六朝時代を通じて南朝文人の詩作全体に広く見られるようになった虞韻唇音・云母字の魚韻との通押現象は、音声学・音韻論的にどのようなメカニズムに基づくのであるか。本節では、まず分布を手がかりに音韻論的解釈を施し、その後音声学的メカニズムを論じたいと思う。

4.1 分布

周知の通り、『切韻』魚韻では云母と唇音は「あきま」となっており字が存在しない。これは、上古中国語の唇音および円唇軟口蓋音（牙喉音）字が、中古中国語（『切韻』音系）で虞韻に変化したためである。Baxter-Sagart（2014: 223）の変化規則を示すならば以

下の通りである[9]。

*P(r)a > Pju
*K^{w}(r)a > Kju

それ以外の声母（非円唇牙喉音含む）は、中古で魚韻に変化した。

*C(r)a > Cjo

円唇化していない軟口蓋音（牙音・影母・暁母）は魚韻に変化したものの、云母は必ず円唇化声母であったため、結果として魚韻云母があきまになってしまった。魚韻の由来は原則として魚部であり、他の韻部からの補充もなかった。

云母・唇音の魚韻字をあきまとするのは、あくまでも『切韻』において魚韻云母・唇音字が存在しないということに過ぎない。音韻論的には、云母・唇音に後続する開音節の三等字において/u/と/o/の対立がない、すなわち**/u/と/o/が中和（neutralization）している**と言うべきである。『切韻』では唇音・云母字を虞韻に帰属させているが、実際の六朝初期呉方言では/u/と/o/が開口度[high]あるいは円唇性[round]の弁別特徴の点で中和し、後舌性[+back]および非広母音性[-low]の弁別特徴のみを有する原音素（archiphoneme）/O/（=/u-o/）が現れていたと考えられる。原音素/O/は/u/と/o/の中間的な音声実現であり、呉方言話者にとっては魚韻と虞韻の両方に近いと感じられたため、両者とも通押することが可能であったと考えられる。遠藤（1991: 256）は『切韻』において唇音声母の後で合口介音の対立が中和しているとするが、このような中和が六朝初期呉方言では介音のみならず主母音においても発生していたのだろう。

4.2 音声

上古の魚部唇音・円唇軟口蓋音声母が中古で虞韻に移行したのは、言うまでもなくこれらの声母に共通する音声特徴、すなわち円唇性によるものであると考えられる。声母の強い円唇性は母音の強い狭母音化・円唇化を促し、虞韻/u/に変化させた。しかし、少なくとも上述の例において、円唇軟口蓋声母のうち「矩*k^{w}aʔ（巨声）」「衢*ɡ^{w}a（瞿声）」「娛*ŋ^{w}a（呉声）」「紆*q^{w}a（于声）」のような云母以外の声母については魚韻との通押はほとんど見られない。発表者は、六朝初期呉方言において、云母以外の牙喉音声母の円唇性が介音（わたりの半母音）ないしは主母音の円唇性の弁別特徴という形で声母から分離した（*k^{w} > kw）のに対して、云母および唇音では声母において円唇性が保存されていたためであると考える。

唇音の声母は p, p^{h}, b, m であり、声母の中に円唇性が含まれている。仮に合口介音が発生していたとしても、声母それ自体の円唇性が無くなることはあり得ない。それでは、牙喉音、云母においてこのように声母の中に（同時調音ではなく）円唇性を含んでいる子音は何か。Jaxontov（1977）は上古の云母に*w を再建したが、発表者は、六朝初期呉方言においてもこの w が云母に保持されていた可能性を提唱する[10]。もちろん、同じく円

[9] *P は唇音（*p, *p^{h}, *b, *m）、*K は牙喉音（*k, *k^{h}, *g, *q, *q^{h}, *ɢ）、*C はその他の子音を代表させている。牙喉音の右肩の^{w}は Jaxontov（1960）が再建した円唇軟口蓋化声母を表す。*a は魚部の主母音である。ju と jo はそれぞれ中古の虞韻、魚韻の韻母である（j は介音）。なお、これらはあくまでも音素表記であることに注意されたい。

[10] この他、兪敏（1984/1999: 15）は後漢三国の梵漢対音で梵語の v が匣母合口や云母字で音訳されて

唇性を有する子音として潘悟雲（1997）や Baxter-Sagart（2014）の上古音のように、円唇化した口蓋垂音 $ɢ^{w}$を立てることも可能であるが、同じく円唇化の同時調音を持っていた「矩」*k^{w}などの牙喉音と異なる振る舞い（すなわち云母以外の牙喉音は魚韻と通押しない）を説明することが難しいように思われる。冒頭で引用した『顔氏家訓』からも、南方で虞韻「矩」は明らかに魚韻と区別されていたことが分かる。「矩」が魚韻と中和していたとは到底考えられないだろう[11]。

そして、このような円唇子音に後続する環境における中和から、六朝初期呉方言において魚・虞韻主母音の対立を決定づけていた弁別特徴も開口度[high]よりはむしろ円唇性[round]であることが推測できる。中古中国語の魚韻について平山（1995）が再建した韻母[ɪə]に類する音価は、六朝初期呉方言に対しても適用することができるだろう。

虞韻唇音・云母字の原音素/O/は、[u]~[ə]の間のいずれかの音声であったと考えられるが、特定することは難しい。魚韻と通押することから考えて、他の虞韻と比べて円唇性が弱めであったのかもしれない。羅常培は魚・虞通押のメカニズムとして「異化作用」を想定したが、魚韻と通押するのが唇音・云母のような円唇声母に限定されるのであれば、そのような声母の円唇性に対して母音に「異化作用」が働いたことは十分に考えられるだろう。

魚・虞韻の上古 > 六朝初期呉方言の音韻変化を示すと、表 2 のようになる（声調略）。呉方言における三等介音の発生時期は明らかではないため、ここでは表記していない。

表 2 魚・虞韻の音韻変化

	上古	六朝初期呉方言
虞韻唇音：夫	*ba	bO [bə~bu]
虞韻云母：宇	*wa	wO [wə~wu]
虞韻牙喉音（魚部円唇軟口蓋化声母由来）：矩	*k^{w}a	k(w)u [ku]
虞韻牙喉音（侯部由来）：拘	*ko	k(w)u [ku]
魚韻（魚部非円唇軟口蓋化声母由来）	*Ca	Co [Cə]

4.3 模韻について

また筆者は、六朝初期呉方言、更には南朝士人の詩作言語においては一等韻である模韻の主母音にもこの原音素/O/が現れていたと考えている。このように再建することで、（文人や時期により魚・虞韻のどちらかに偏る傾向があるとはいえ）模韻が六朝を通じて魚韻、虞韻の双方とも通押することも説明できると考えられる。

主母音/o/と/u/が三等韻である魚韻と虞韻では唇音・云母を除いて中和しないにも関わらず、一等韻である模韻では子音を問わず中和していた（すなわち模韻という 1 種類の韻目しかなかった）ことは、1 つの興味深い可能性を示唆する。すなわち、中和は通常、

いることを根拠に、これらの声母の音価が[w]であることは疑いないとする。また、鳥羽（2018: 97-99）は匣母（一部）と云母字が疑母や唇音字とも諧声・通仮することがあることを根拠に、これらの匣母・云母字の上古音が疑母・唇音と音声的に類似する*w であったとする。

[11] 虞韻牙喉音字に対し魚韻の反切下字が使われている例として『經典釋文』に 12-11a「甌（虞韻平声）」（「驅」の異体）の「起居反（魚韻平声）」、20-28a「劬（虞韻平声）」の「其居反（魚韻平声）」、6-34b「鴝（虞韻去声）」の「於據反（魚韻去声）」の 3 例があるが、いずれも僻字であり、これら以外の虞韻牙喉音字においてこのような混同を示す例はない。また、これら 3 字はいずれも上古侯部字であり、円唇牙喉音由来ではない。なお、唇音・云母字については『經典釋文』17-1b「侮（虞韻上声）」に「亡呂反（魚韻上声）」と付す例が見られる。『經典釋文』の反切例は王懐中（2019: 717-718）より採った。

有標環境において発生する[12]。虞韻の場合も、円唇子音という有標環境において中和が発生している。このことは、中古より前において非三等韻ではなくむしろ三等韻が無標であったという近年の説[13]を裏付ける可能性を示唆する。

特に、Norman（1994）や Baxter-Sagart（2014）が非三等韻の上古音として咽頭化子音を再建していることは注目に値する。Jakobson-Fant-Halle（1952: 31）は、円唇化と咽頭化の聴覚上の類似を指摘し、両者に対して同じ弁別特徴[flat]（変音調性）を与える。呉方言、あるいは南朝士人の詩作言語において非三等韻は一等韻に対して有標的であり、その有標性は声母の咽頭化あるいは円唇化に類する特徴で代表されていたのかもしれない。

5. 結論

二陸を中心とする三国～晋の呉方言では魚韻と虞韻は明確に区別されていたが、虞韻の唇音と云母字のみ魚韻と通押していた。特に、虞韻唇音・云母字と魚韻の通押現象は宋の彭城劉氏のような南渡士人に強く見られ、斉・梁以降は程度の差はあれど謝超宗・謝朓・王倹・江淹・張纘・徐陵・庾信、あるいは北朝出身の牛弘といった多くの文人に広く共有されるようになる。このような南朝文人の用韻傾向が呉方言から直接影響を受けたものなのか、あるいは『切韻』につながる押韻の規範言語が整えられていく中で呉方言とは独立して「共通改新」的に発生したものなのかにわかには決定できないが、六朝全体を通して広く見られる根拠のある言語現象であることは確実であると思われる。

六朝初期呉方言で虞韻唇音、云母字のみ魚韻と通押するのは、これらが介音や主母音ではなく声母に共通する音声特徴すなわち円唇性を保持しており、その円唇性が主母音の対立を中和させたためであると考えられる。このことから、六朝初期呉方言での云母の音価は唇音と同じく声母自体に円唇性を有する w であると推定される。これは Jaxontov の上古再建音価にも符合する。また、このような中和した原音素母音は模韻にも現れていたと考えられ、このことは音韻論的に一等韻が本来三等韻に対して有標的であった可能性を示唆する。

本稿で詳しく論じられなかった問題として、尤韻や咍韻などの隣接韻との関係がある。六朝初期呉方言ではこれらの韻が魚・虞韻と通押することがあるが、この特徴は魚・虞韻の区別とは違って後の南朝文人には受け継がれなかった。このような隣接母音との連鎖関係は、模韻が魚韻よりも虞韻と近い関係に変化していった理由を解き明かす鍵にもなるように思われる。このような点は、今後六朝全体の押韻状況を精査していく中で明らかにしていきたいと思う。

〈参照文献〉

遠藤光暁 1991.「『切韻』における唇音の開合について」,『日本中国学会報』43 : 247-261

[12] 例えば、現代北京語は藤堂（1956）によれば主母音の開口度のみが弁別的である/a ə ɪ/の三母音体系であるとされる。しかし、半母音（介音）/j/と韻尾/n/に挟まれた環境で、母音は/a ə/の二母音体系に減ずる。藤堂（1956: 241-242）は、「煙」yān と「陰」yīn の音素表記をそれぞれ/jan/と/jən/であるとする。これは、中和の概念を用いないアメリカ構造主義的な解釈である。もし中和の概念を用いるならば、これは/j/介音に後続し、/n/韻尾に先行するという有標環境において母音の開口度の対立が中和しているに他ならない。/j/介音（及び/n/韻尾）の強い狭母音性の特徴が、主母音における開口度の対立を阻害しているのである。

[13] 中古において三等韻は介音を持つという点で非三等韻に対して有標的である。しかし、三等韻は韻目数を見ても非三等韻のほぼ同数に相当するほど数が多い。この点から、鄭張尚芳（2013: 171-172）は三等韻が上古では無標であり、中古になって有標に変化した可能性を指摘する。

頁。
木津祐子 1992.「『真誥』中の押韻字に見える言語的特性」, 吉川忠夫（編）『中國古道教史研究』。京都：同朋舎出版。
木津祐子 1996.「陸機と「楚」：聲律意識の形成について」,『中國文學報』1996(53)：32-51 頁。
藤堂明保 1956.「北京語の音韻」,『中国語学』1956(54)：235-244 頁。
鳥羽加寿也 2018.「上古音における喉音の再分類について」,『待兼山論叢 哲学篇』52: 93-107 頁。
陳寅恪 1936.《東晉南朝之吳語》,《中央研究院歷史語言研究所集刊》7(1)：1-4 頁。（1992 所収）
陳寅恪 1992.《陳寅恪史學論文選集》。上海：上海古籍出版社。
魯國堯 2002-2003.《“顏之推謎題”及其半解》,《中國語文》2002(6)：536-549 頁, 2003(2)：137-147 頁。（2003 所収）
魯國堯 2003.《魯國堯語言學論文集》。南京：江蘇教育出版社。
羅常培 1931.《切韻魚虞之音值及其所據方音考》,《中央研究院歷史語言研究所集刊》2(3)：358-85 頁。（1963 所収）
羅常培 1963.《羅常培語言學論文選集》。北京：中華書局。
潘悟雲 1983.《中古漢語方言中的魚和虞》,《語文論叢》2：78-85 頁。（2002 所収）
潘悟雲 1997.《喉音考》,《民族語文》1997(5)：10-24 頁。（2002 所収）
潘悟雲 2002.《著名中年語言學家自選集 潘悟雲卷》。合肥：安徽教育出版社。
平山久雄 1995.《中古漢語魚韻的音值：兼論人稱代詞“你”的來源》,《中國語文》1995(5)：336-344 頁。
王懷中 2019.《《經典釋文》陸氏音系》, 北京：中華書局。
王力 1936.《南北朝詩人用韻考》,《清華學報》11(3)：786-842 頁。（1991 所収）
王力 1991.《王力文集 18 中古音：等韻及其他》。濟南：山東教育出版社。
俞敏 1984.《後漢三國梵漢對音譜》,《中國語文學論文選》。東京：光生館。（1999 所収）
俞敏 1999.《俞敏語言學論文集》。北京：商務印書館。
鄭張尚芳 2013.《上古音系（第二版）》。上海：上海教育出版社。
周祖謨 1943.《顏氏家訓音辭篇注補》,《輔仁學誌》12(1,2)：201-220 頁。（1966 所収）
周祖謨 1963.《切韻的性質和它的音系基礎》,《語言學論叢》5：39-70 頁。（1966 所収）
周祖謨 1966.《問學集》。北京：中華書局。
周祖謨 1982.《齊梁陳隋時期詩文韻部研究》,《語言研究》1982(1)：6-17 頁。（1996 に《齊梁陳隋時期韻部總說》、《齊梁陳隋時期韻部的演變》として所収）
周祖謨 1996.《魏晉南北朝韻部之演變》。臺北：東大圖書公司。
Baxter, William H., and Sagart, Laurent. 2014. *Old Chinese: a new reconstruction*. New York: Oxford University Press.
Jakobson, Roman, Fant, C. Gunnar M., and Halle, Morris. 1952. *Preliminaries to speech analysis: the distinctive features and their correlates*. Cambridge: M.I.T. Acoustics Laboratry.
Jaxontov, Sergej E. 1960. Fonetika kitajskogo jazyka 1 tsysjačeletija do n. e. (labializovannye glasnye). *Problemy Vostokovedenija* 1960(6): 102-115.
Jaxontov, Sergej E. 1977. Načal'nyj w v drevnekitajskom jazyke. *Vostokovedenie* 3: 57-66.
Norman, Jerry. 1994. Pharyngealization in Early Chinese. *Journal of the American Oriental Society* 114: 397-408.

Ting, Pang-hsin. 1975. *Chinese Phonology of the Wei-Chin Period: Reconstruction of the Finals as Reflected in Poetry.* Taipei: Institute of History and Philology, Academia Sinica.

〈引用出典〉
班固『漢書』，二十五史系列，北京：中華書局，1962 年。
陸德明『經典釋文』，黃坤堯・鄧仕樑編《新校索引經典釋文》上下，臺北：學海出版社，1988 年。
逯欽立編《先秦漢魏晉南北朝詩》上中下，北京：中華書局，1983 年。
沈約『宋書』，二十五史系列，北京：中華書局，1974 年。
蕭子顯『南齊書』，二十五史系列，北京：中華書局，1972 年。
嚴可均編《全上古三代秦漢三國六朝文》一～四，京都：中文出版社，1972 年。

〈付記〉
本稿の執筆に当たり、大阪大学大学院人文学研究科准教授・鈴木慎吾先生作成の「諸家先秦兩漢魏晉南北朝韻譜韻讀」データベース（https://suzukish.sakura.ne.jp/search/xianqin/、未公開データ含む）を活用しました。執筆に当たりご助言を下さった先生方、また貴重なコメントを下さった査読者の先生方に感謝申し上げます。

（『雲漢』1 号，2023 年 3 月 26 日）